

【p 92～p 95】 わが道を歩む ―池田草庵―

1 資料活用にあたって

- 本資料では、苦悩の末、和尚の許しを得ないまま寺を出て自ら選んだ儒学の学問に励む一方で、自分の行動の責任を自覚し続けた、草庵の「自律的で責任ある生き方」について考える。
- 内容項目A（1）では、自分の自由な意思によっておおらかに生きながらも、そこには内から自覚された責任感の支えによって、自ら考え、判断し、実行するという自律性が伴っていることが大切である。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公（草庵）を通して池田草庵の生き方について考える資料であり、草庵の立場で場面を捉えていく。（子どもが「草庵」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 寺にあずけられ、育てられた池田草庵が、仏教の修行のかたわら儒学と出会い、僧侶の道を選ぶのか儒学の道に入っていくのかを苦悩する。その苦悩は、幼い時から育ててもらった恩義を裏切ることや、儒学を学ぼうとするのに「孝」の徳に反することへの苦悩である。

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『草庵先生』 監修 木南卓一
編集者 八鹿町教育研修所（八鹿町（現 養父市）教育委員会内）
発行者 池田草庵百年祭奉賛会
発行所 八鹿町（現 養父市）教育委員会 1981年
- ・ 『池田草庵先生 一生涯とその精神―』木南卓一 著
発行者 池田草庵百年祭
発行所 記念事業実行委員会 八鹿町（現 養父市）教育委員会内 1976年

○ 池田草庵について

- ・ 幕末に現在の養父市にある宿南に生まれた。
- ・ 草庵の自律の精神は「慎独」という言葉に象徴されている。「慎独」とは、「自分がひとりである時でも心を正しくもち、行いを慎む」ということである。
- ・ 草庵の思想は、「肄業餘稿（いぎようようこう）」という著作にまとめられている。
「理想は高くもち、学問は身近に役立つことを重んじる。（19条）」
「学問をする者は、日常の営みや肉体労働をいやがってはいけない。（93条）」
「たとえ人を欺くことはできても、自分を欺くことはできない」（143条）
「人間が草木と同じように朽ちてしまわないそのわけは何であろうか。それは徳の備わったりっぱな人間となり、そのりっぱさが世にたたえられるようになる点である」（211条）
- ・ そういった草庵の生き方に共鳴した若者達は、切磋琢磨して学んだ。「青谿書院」のトイレが今も残っているが、その戸には、蠟燭の炎のあとが多くある。これは、消灯後、トイレの戸に蠟燭を置き、その明かりで学び続けた塾生の志を象徴している。
- ・ この弟子たちの中から、幕末から明治にかけて日本の屋台骨を背負う人々が現れた。文部大臣となった久保田譲、東京大学総長や文部大臣を歴任した浜尾新、京都府知事となり琵琶湖疎水を造った北垣国道などである。
- ・ 「青谿書院」は現存するが、その庭にもみの木が立っている。当時、門人達が植えたものだということである。天を目指して高くそびえるこのもみの木は、亡くなっても草庵の志を象徴するものといえる。

4 展開の具体例

わが道を歩む ―池田草庵―

- ・主 題 名 ・自律的な生き方 A (1)
- ・資料の概要 ・僧侶の道の修行中でありながら儒学を深く学びたいという思いが募る草庵は、和尚に願いを申し出るが許されず、世話になった和尚の恩との狭間で苦悩する日々を送り、ついに許しを得ぬまま寺を出る。その後、学問に励みながら和尚の許しを得ようとするが会ってももらえず、「人として和尚様に認められるようになること」を誓い努力を続ける。ついに、和尚に許された草庵は、安堵感の中で、自らの自律的な生き方を新たに誓う。
- ・ね ら い ・和尚の許しを得ないまま寺を出たが、その責任を自覚し続けた草庵の生き方を通して、自由を大切にしながら、自律的で責任ある行動をしようとする道徳的心情を育てる。

展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	あなたには、進みたい「わが道」がありますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・ろうそくの炎を見つめる主人公の気持ちを考える。 ・悩んだ末に満福寺を去る時、小走りに駆け出した主人公の気持ちを考える。 ・和尚に詫びに行ったが会ってもらえなかった時の主人公の気持ちを考える。 ・和尚と語り合った後、寺を去る時に深々と頭を下げる主人公の気持ちを考える。	ろうそくのほのおを見つめる日が続いた時、草庵はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・京都に行き、相馬九方先生の下で儒学を学び続けたい。 ・儒学の道に入れば、和尚様を裏切ることになる。 ・私はどうすればよいのだろう。 満福寺を去る時、何かを振り切るかのように小走りに駆け出した草庵は、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・必ずお許しをいただきにまいります。 ・もう迷わない。儒学の道に入ることを決断したのだ。 「和尚様が会ってくださらないのは、仕方ないことである」とつぶやきながら、草庵はどんなことを考えていたのでしょうか。 ・だまって出た私に会われないのは仕方がないことだ。 ・まだまだ私は未熟だ。 ・自分が選んだ儒学の道でもっと努力して、人として和尚様に認めていただくしかない。 「何も言わんでよい…」とおだやかな笑顔で和尚に声をかけられた草庵は、心の中で何と言ったでしょう。 ・許していただき有難うございます。 ・私の生き方を和尚様に認めていただくことができた。 ・責任ある生き方の大切さを教えていただき有難うございました。
終 末	・自分の考えを書く。	考えたことを道徳ノートを書きましょう。

頼りなくゆれるろうそくの光を見つめる主人公の心のゆれ(迷い)を考えさせる。

迷いを断ち切り、寺を出る決断をした主人公の心を考えさせる。

「人としての責任ある生き方」を問われていると主人公が自覚していることをおさえる。

「人としての責任ある生き方」を認められた安堵感の中で、自律的な生き方について考える主人公の心情の高まりをおさえる。